

---

# Paradise Island ~ あなたの島に流されて

淡雪ぼたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Paradise Island あなたの島に流されて

### 【Nコード】

N8684U

### 【作者名】

淡雪ぼたん

### 【あらすじ】

25歳の立花瑞穂は、結婚式間際に結婚相手から逃げられたショックから自暴自棄になり、海岸に係留されているボートに腰掛け飲めないお酒を無理に飲んだら少量で急性アル中に……。そのまま記憶を失って目覚めたら全く知らない場所にいた。どうやら、ボートで流され漂流し、海洋研究をしている鮫島俊彰所有の島に流れついてしまったらしい。その人の島で始まる過酷な？サバイバル・エコ孤島ライフと自然の中で心癒され、新しく生まれる恋のお話です。(夏っぽい面白いお話を……。と思ついで、書いてみました。)

## 第1話 あなたの島に流されちゃいましたっ！！

．．．．．目が覚めたら全く見知らぬ場所にいた．．．．．  
知らない家のベッドの中．．．．．オークのフローリングに眩しいぐ  
らい真つ白な壁と天井．．．．．それにナチュラルな白木の家具．．．  
．大きな窓からは、心地良い波の音が聞えて来て．．．潮の香りの  
する風が入って来て．．．レースのカーテンをフワリフワリと揺ら  
す．．．．．眩しいぐらいの光が部屋に広がる．．．．．  
むくりと起き上がり、部屋をグルリと見渡す．．．．．

ここは何処？ 何で私はここにいるの？ もしかして記憶喪失？

「私は．．．立花瑞穂、たちばな みずほ昭和60年12月5日生まれの25歳、住  
所は東京都 東雲市 秋穂町 5丁目．．．．．電話番号は．．．．．  
よし！頭の方は大丈夫！！」

「お前何やってんだ！！」

「わっ！！」

気がつけば、とても背の高い白衣を着た男が部屋入り口に立っ  
ていた。

髪はサラサラのナチュラルショートヘアで6：4辺りでさりげなく  
前髪をサイドに流してる．．．．．  
銀縁眼鏡が印象的で顔がハッキリ分らないが、すごく整った顔を  
しているように感じる。口はキリリと真一文字、眼鏡の奥の眼光は鋭  
く奥二重．．．まつ毛が長い．．．．．いわゆるイケメンの部類に入  
る男だ．．．．．

だけど．．．．．手にステンレスの医療器具トレイを持って．．．怪  
しい．．．それに不気味．．．怖い．．．もしかして．．．．．

「へ．．．変質者?!」  
恐怖で後ろにズルズルと後退った。

「馬鹿者!!何が変質者だ!!それはお前だろう!!泥酔状態で人の島に勝手に漂流してきて．．．。自宅侵入罪で訴える所だぞ!!それに俺は医師として仕事はしてないが、医師免許も持つてるし、卒後臨床研修も終えてるし、医療行為を行ってもなにも問題は無い身だ!!」

迫力ある大きな声で怒られて、瑞穂はシュンと萎れてしまった。  
「す．．．すみません．．．」

男はブスツと怒った顔をして、瑞穂の腕にブスツと注射をした。

「これは、ビタミン剤だ!!」

「は．．．はあ．．．」  
腕にチクンと痛みが走った．．．。

「で．．．。名前と年齢と住所と電話番号はさっきの独り言で分かったが．．．。何で君は、泥酔状態で小舟に乗り、この島に渡ってきたんだ?!」

注射器をカシヤンとトレーに戻し、ベッドサイドに腰掛け酷く迷惑そうに怪訝そうな顔をして、その男が聞いてきた．．．。

「え．．．? 泥酔状態．．．小舟．．．島に渡った?」

瑞穂は目を上に向けて、暫く考え込んで．．．何があったのだっけな?と、思い出そうと考え込んだ。

「えーと．．．えーと．．．。そうそう．．．。昨晚、海岸に行つて．．．。砂浜に置かれていたボートに腰かけて、缶ビールを開けて、グイッと飲んで．．．。で．．．気がついたらここにいました」

「．．．という事は、缶ビールを飲んだら急性アルコール中毒になつて、ボートの中に倒れ込んだ。」

そしてボートはしっかりと係留されてなく、ロープが緩んで、満潮の時に船が沖に出てしまい、ここまで流されてきたという訳か．．．

「なるほどな．．．と言う表情をして、その男が何やら考え込むような表情をした。」

「まかり間違っていたら、君は死んでいたぞ！！」

「えっ?!」

「まず．．．。君は昨晚と言ってるが、俺が海岸で発見した日から数えて、今日は2日目だ!!つまり．．．君が漂流してから3日目が過ぎていると思うが．．．」

眉間にしわを寄せて神妙な表情でその男は言った。

「えええーっ!!」

またムンクの叫び状態の瑞穂．．．。

「ここは久里浜から高速船で4時間ぐらいの島なのだが．．．。位置的には三宅島や神津島よりももう少し本土から離れた所で、俺の所有する孤島だ．．．。もしかして君は12時間以上海を漂っていたのではないか?ここまでたどり着いたのが奇跡としか思えん．．．」

「その男も青ざめた顔をした．．．。

瑞穂はゾワッと青ざめた．．．。

「死んでいた．．．」

あの日の晩は、やけ酒を飲んで確かに死にたいとは思っていたが．．．

。あくまでもそう思っただけで、本当に死にたいなどは思わなかった……。そんな事を思つて自棄になつたから、罰が当たつたのかな？

「でも……。3日間私は泥酔状態で眠っていたのですか？」

「ああ……。俺が医師免許と医療器具を持っていて良かったぞ！適切な処置をしたお陰で命拾ひしたんだから……。感謝しろよ！！」

「は……。はい……。ありがとうございます。あと、迷惑おかけしてすみませんでした。あの……。あなたのお名前は……」

「俺は、さめしま としあき 鮫島俊彰 31歳、ここで海洋生物の研究をしている者だ」

凄い人だ！！だから金縁眼鏡が違和感なく似合つて、知的そうに見えるんだ……。

そして何気に自分の着ている服を見たら……。んっ？！……。男物のパジャマ？！しかもその中身は何も着てないしっ！っ！！

「えっ？ えええーっ！！！」

またムンクの叫び状態になつた……。

俊彰も気がついて……。

「ああ……。それか……。全く……。服がドロドロ状態……。あんたもドロドロ状態だから、綺麗に拭いて着せ替えてやつたんだぞ！！感謝しろよ！！！」

全く表情も変えずに当り前のようにそんな事を言つたなんて……。アワアワ……。と口をパクつかせ驚いている瑞穂に更なる追い討ちをかける一言……。

「そんな事ぐらいで驚くな！！人間誰だって同じ形体をしてるんだから．．．まあ多少は微妙に違うかも知れんがな．．．。医療介護の内だ特に意味は無い．．．。俺だって、仕方なくなんだからな．．．。そんな顔をされるとムカツク．．．。腹減っただろう．．．。食べるものをもって来てやる！！」

そう言つて俊介は、医療トレーを持ってスタスタと部屋から出ていった．．．。

「ウソツツ！！！」

考えただけで恐ろしくなってくる．．．。

あの人が．．．こんなことや．．．あんなことや．．．そんなことを？！

気が変になりそうで、『キーツ！！！！』と頭をかきむしった。

ああ．．．。でもあの人のお陰で私は助かったんだわ．．．。全くあの日から私の人生は最悪続きだわ．．．。

(第2話に続く)





## 第2話 漂流したあの日の事

それから暫くして、俊彰が食事をトレーに乗せて持って来てくれた。「ほら．．．食事を持ってきたぞ！！ この3日間で体に入れたものといったら、点滴と栄養剤だけだったから、お腹が空いてるだろう？慌てないでゆっくり食べなさい」

「あ．．．ありがとございます」

メニューは青菜がゆ、卵焼、冬瓜のくずあんかけ、野菜ジュース．．．

ひとくち食べて、薄味でだしが効いてて、体に優しそうで凄く美味しかった．．．。

「え．．．これ．．．鮫島さんが作ったのですか？」

「この島には俺しかいないからね．．．なるべく自給自足を目指してるし、何でも自分でやらなくてはいけないし．．．出来ない事は命を落とす事にも繋がるからね．．．。病気になるわけにもいかないから、常に健康に気をつけてるしね。この程度の料理はそう大した事無いよ．．．」

「凄いですね．．．。凄く美味しいです」

酷く疲れ切った体に染み渡るような、優しく温かい味だった．．．。それになんて逞しい人なんだろう．．．。たった1人でここで暮らしてるなんて．．．。

この人を目の前にしていると、私はなんてつまらない男に熱をあげていたのだろうと、自分が愚かに感じてきた。

「．．．あの、つまらない男の名前は、こいで まさし小出政史、2つ年上の27歳。

私は、彼との結婚を1週間後に控えていた．．．。

私は大手通販会社の総務部にいて、彼はシステムエンジニア部で、いわゆる社内恋愛だった．．．。

彼の希望が、妻はキャリアウーマンよりも、家において家庭を守って欲しいとの事で、会社をひと足早く寿退社した。

そして結婚を1週間後に控えていた時期になって、この結婚を無かった事にしてくれと宣のたまいやがった！！ その訳が．．．。実は、社内の別の女性とも付き合っていて、その彼女が妊娠してしまったから責任をとらなくてはいけなくなってしまったのだと！！

奴は慰謝料として500万渡して来た！！ いわゆる奴の実家は土地成り金のお金持ちで、親に出してもらったらしい．．．。

結婚式準備にかかった費用全ても弁済してくれた．．．。そこまでされては文句のつけようが無いじゃない．．．。

私の親も、不誠実な人だと結婚前に分つてかえって良かった．．．。もうこの事は忘れよう．．．と言った．．．。きっと内心とても悔しがってると思うし、心傷めて悲しんでくれると思うし．．．。

親には申し訳無い事をしてしまった．．．。結婚を失って、仕事も失って．．．私は空っぽになってしまった．．．。

で．．．あの日は本当なら結婚式を挙げる日だった．．．。場所は湘南にあるステンドグラスの美しい大聖堂教会．．．。

未練がましく、あの教会を一目見たくなくて、出かけてしまった．．．。

．．．そして見てしまった．．．。奴はキャンセルなどしてなかった．．．。ただ花嫁が変わっただけだった．．．。

幸せそうに見つめ合う、純白のドレスに身を包み幸せそうに笑う花嫁とあいつ．．．物凄い衝撃だった．．．。

私はアルコールにとても弱くてすぐ回つてしまうし、あまり好きじゃないのに、コンビニで缶ビールを買って、湘南の海をボーッと見

ながら、砂浜に置かれていた小舟に腰掛け、缶ビールのプルトップをプシュッと開けて、グビグビッと飲んだ……。ジューワーツと喉を刺すような炭酸の感覚と、苦味が体に広がった。

そして……。記憶が途切れて……。

「はぁ……っ」

思い出したらついガクツと力が抜けて落ち込む……。

もう奴には未練は無くなったが、なんて私は間抜けなのだろうか。

こんな所まで漂流して来て……。これでもし命を落としてしまつたら、もう死んでも死にきれない感じだ……。

だけど……。恥ずかしすぎる……。

「どうした？ 食が進まないか？」

瑞穂があまり食べ無いので、心配そうに顔を覗き込んだ。

「い……。いいえ……。あの日の事を思い出したらもう落ち込んでしまつて……。」

「何があつたのか、知りたいな……。」

「きつと笑つと思います……。」

「そんなに酷い事なのか？」

「もう……。最悪です」

「でも、助けてやったんだから、俺は命の恩人でもあるし、知る権利はあるよな？」

「うーん．．．」とても渋い顔をしてから諦めて話す事にした。

「わ．．．わかりましたっ！！話しますっ．．．」

瑞穂は今までであった事を全て話した．．．。

「．．．．．とこう言う訳です．．．」

「それは最悪な奴だな．．．。結婚しなくて良かったよ．．．今頃君の身代わりになった花嫁は『こんなはずじゃなかった！』って泣いてるぞー！！」

そっかーっ！！そう言う考え方もあるなと思った．．．。

あんな不誠実な最低男！！結婚しなくて済んだのだからラッキーだったのかもしれない．．．。

「それにさ．．．。漂流してこの島に流れついて、命拾いして．．．

。君は超ラッキーな人としか思えないんだが．．．」

にこりと笑って言った言葉が、またまた心に癒しとなって広がった．．．。

「そ．．．そう言う風に考えたら、そうですね．．．。奇跡としか思えないですよね．．．」

だんだん元気も出てきた．．．。いやあく鮫島さんって凄くいい人かも．．．。

「まあさ、君のような漂流物を拾ってしまった俺にとっては、最悪なんだけどね．．．」

ガン！！天国から地獄とはこういう事を言うのだと思った．．．。この人は天使の皮を被った悪魔かもしれない。（撃沈）

（第3話に続く）

### 第3話 この島の全貌は・・・。

.....あれから3日が過ぎた。私が漂流してから6日目.....ここに上陸してから5日目という時間が過ぎた.....。家には鮫島さんから固定電話を借りて連絡を入れた.....。

最初、両親は卒倒するぐらいのパニック状態で、私がああ海岸で自殺してしまったと思って捜索願も出していたらしい.....。

まあ確かに漂流遭難してしまったのには違いない.....。

まかり間違っていたら確かに命を落としていたのだから.....。

『早く戻って来い!!』と言われたが、ここに定期的に船(食料物資、郵便小包み物など.....)が来るのは、次回は2週間後だそうで、その船の帰り便に乗せてもらう事にしたので、まだ帰りたくても帰れない!!

お世話になっているので、その間色々お手伝いさせていただく事になった.....。

と言っても、まだ体が本調子ではないので、今のところリハビリ程度に体を動かす状態だ.....。

この島の名前は『十六夜島いそよこい』単純に、島の形が十六夜の月の形に似てるから鮫島さんが命名したそうだ.....。ほぼまあい形をしているようだ.....。

絶対に『鮫島島なめじまい』だと思ったのに、意外だった.....。

島の面積は、約20K?少し.....。周囲約16Km、いちばん高い所の標高は800m。

島の75%近く、木が生い茂っていて見た目は密林のジャングルという感じ.....。

温暖で年中雨が降り水資源が豊富.....。でも冬の季節は10度ぐ

らいまでは冷え込むらしい．．．。  
家の中には暖をとる為の暖炉が、部屋の中央であるリビングについていた。この暖炉ひとつで部屋中を温められる構造になってるそう  
だ．．．。薪になる木は、豊富に生い茂ってるから何処からでも調  
達できる．．．。

調査した結果、ランクCの活火山で、100年活動度、および1万  
年活動度がともに低い活火山との事で、温泉は望めないが、火山噴  
火の心配も無い。

電話及び通信は、本土より光ケーブルを海底を通して引いてあるそ  
うで、携帯電話は使えないが固定電話が使えるし、PC使用可、テ  
レビも見れる．．．。（この周辺は貴重な海洋生物研究対象地域と  
の事で、研究データを作成、調査を続ける事を条件に、国費より  
無償でケーブルを引いてもらったらしい．．．）

電力は風力発電、太陽光発電、豊富な水資源を利用した水力発電で  
充分賄えるらしい．．．。

污水处理は大型浄化槽で処理．．．。  
水はそのまま飲んでも問題ないくらい．．．いえ、本土の水道水と  
比較すると断然良い水らしいが一応飲用水のみ大型のRO（逆浸透  
膜）浄水器を取り付けているそうだ．．．。  
天候によっては川が濁ったりもするため、飲用以外の家庭用水は簡  
易ろ過装置をつけてるとの事．．．。

この家の間取りは、6LDK+広い研究室棟、台風でも飛ばされ  
ないように頑丈な鉄筋コンクリート作りになってるが、見た目は南  
仏プロバンス風の素敵なお家．．．。  
起き上がれるようになって、初めて家を出て、この家の外観を見た

時には思わず歓声を上げてしまった。

淡いベージュの壁に、所々西洋瓦の傾斜屋根がついていて、ベランダ手すりはアイアンウッドの素敵なデザイン．．．。厚手の強化ガラス窓には、台風に備えて頑丈なシャッターもついているが、飾りに真つ白な鎧戸（西洋の飾り雨戸）がついていて．．．。凄く可愛い．．．。

1階ダイニングにくつついて、六角形のガラス張りの部屋であるコンサバトリールームがあり、雨の日の朝はそこで朝食．．．。そしてそのコンサバトリールームの開き戸を開けると、広々いウッドデッキに出られて、エレガントなデザインの真つ白な丸いガーデンテーブルと椅子が4客．．．。お天気の良い日はここで食事を摂る。ちゃんと大きなサンシェードがついてるから、日差しのキツイ日でも、少々の雨の日でも大丈夫！！

半戸外感覚で潮風と海のサウンドを聞きながら食事．．．素敵．．．。ウッドデッキの端の方には、海の方を向いて2人掛けのウッドのベンチになったブランコが置かれている。

鮫島さんはもしかしてロマンティスト？

ここでグラス傾けて、海のサウンドを聞きながら星でも見るのかな？（素敵かも．．．）

食料は調達できない物のみネット購入しているそうだ．．．。医療品や、研究用の器具、用具、薬品等もネットで注文らしい．．．。便利な時代だ．．．。でも．．．。基本、食料はなるべく自給自足．．．。

．．．昨日の夕食もエライ目にあつた．．．。それは．．．。

\* \* \* \* \*

昨晚、何かお手伝いをしようとダイニングにおりていたら．．．大柄な割烹着姿のほっかむりしたおばさんがダイニングに立って料理していた。

（あれ？ この島には鮫島さんだけしかいないって言ったのに．．．家政婦のおばちゃんがいるの？）

「こ．．．こんばんは．．．」

その人が振り返って、ビックリした．．．『ゲゲゲゲ．．．さ．．．鮫島さん．．．』

「なに他人行儀な事言ってるんだ！！俺だ！！」

味見用の小皿とおたまを持って振り返って．．．完璧におばちゃん仕様の鮫島さんだった．．．。

「その格好．．．家政婦のおばさんが立ってるのだと思ってしまいました．．．」

ちよっとタジツとしながら、上から下まで舐めるように見てしまった。

「フンツ！ 料理の時は雰囲気を出す為に、この格好に限る！！」  
湯気で眼鏡の片目が曇ってて、ちよっとかわゆかったりして．．．。

「は．．．はあ」

でもなんだかその格好が妙に似合っていたりして．．．。

「瑞穂君はいいから、椅子に座って待ってなさい！！これから重要な味つけ作業にとりかかるから．．．」  
クルリと背を向けてまた料理にとりかかる．．．。



「すみません．．．．．」

その華麗な包丁さばき．．．頭の中にレシピがまつたような味つけ加減．．．凄い．．．凄すぎる！！

瑞穂は見惚れてしまった．．．。

．．．．．そして、出来上がったのが．．．。

「わあっ！！鰻重ですね．．．。美味しい．．．。鮫島さんは本当に料理が天才ですね！！」

すっかり鮫島シェフの虜になってしまった瑞穂は、パクパクとあつという間に平らげてしまった．．．。

「おおっ！！いい食べっぷりだね．．．。見ていて気分がいいよ！！  
まだお代わりもあるけれど、食べるかい？」

「ええっ？あるのですか？　じゃあ遠慮なくいただきます」  
3日間何も食べ無かった後は、お腹が空く．．．。

「でも、鰻って．．．。ネット購入ですか？　こんな所でとれるはずないし．．．。」

よそつてもらったお代わりをパクつきながら、ご機嫌の瑞穂．．．。

「いや．．．。海で沢山とれるよ．．．。実はこれは鰻じゃなくつて、海へビの蒲焼きなんだけどね．．．。」

ニヤリと意地悪そうな顔をして、鮫島の銀縁眼鏡が光った．．．。

その途端、瑞穂はひっくり帰った。

「う．．．．．う．．．．．うみへび．．．．．」

「大丈夫！大丈夫！　沖縄だと『イラブー』と言って、高級薬膳料理に使うし、EPA、DPA、オレイン酸、ビタミンA・D、カルシウム、マグネシウムなど、体の機能を高める成分が豊富に含まれ

てるんだよ。

効能としては、コレステロールや中性脂肪の増加を抑たり、血栓を未然に防ぐ働きがあったり、は脳細胞を活性化させたり、老化防止、血圧降下、動脈硬化．．．とにかく体にいいから。

それに女性には、冷え性改善、怠さがとれたり、髪を黒々させたり、お肌にもいいんだ．．．。

まあ．．．。コブラ以上の猛毒があるから、これをとるのは一苦勞なんだがね．．．」

「毒の方は大丈夫なんでしょうか？」

ご飯を喉に詰まらせて、胸をトントンしながら瑞穂が聞いた。

「5分経過したな．．．。君が死なない所を見ると安全なようだ．

。よし．．．俺も食べよう．．．」

またまたニヤツと意地悪そうな顔で笑った。

菜摘が頬に手を当てて『キヤーツ!!!』と悲鳴を上げて、驚いたら．．．。

腹を抱えて大笑いしながら．．．。

「いやあ〜冗談冗談．．．。全然大丈夫だから、安心していっぱい食べなさい。あ．．．。野草のおひたしも食べなさい．．．時々毒草が混ざってる時があるかも知れないけどね．．．。あ．．．これも冗談．．．」

．．．．この鮫島って言う人は．．．。

やっぱり天使の皮を被った悪魔なんだ．．．。瑞穂ははつきりと確信したのだった。

(第4話に続く)



第3話 この島の全貌は・・・。(後書き)

夏休み、無人島に旅してるような雰囲気を出せて、読者様と一緒に  
楽しめたらいいなと思っております。

今後ともよろしくお願い致します。(^^)

#### 第4話 島生活・その1 『農作業体験』

「ヒーツヒツヒツヒツ．．．。アーツハツハツハ．．．」

さつきから鮫島は机をバンバン叩いて、お腹を抱えて涙を流しながら笑っていた。

「もうっ！！鮫島さん！！そんなに笑わなくてもいいじゃないですか！！」

そんな鮫島の様子に瑞穂はすっかりご機嫌斜めで不貞腐れていた。

「だ．．．だって．．．。あゝ腹痛い．．．」

眼鏡を上げて、涙を拭き拭き．．．。笑が止まったかと思うと、また瑞穂を指差して、笑い始める．．．。

「もうっ．．．勘弁して下さいよー！！」

鮫島が笑っているのは、この瑞穂の出で立ちである．．．。

ここに流れついた時には衣類はドロドロのボロボロ．．．。激しい波に揉まれたのか？所々破けていたりもして、もう着れる物ではなくなっていた．．．。

で．．．着る物も無く、ここに来てずっと鮫島からの借り物．．．。シヨーツは新品のボクサーパンツを数枚貰った。最近は女性用でもこのタイプのデザインのものがあるが、明らかに違うのは前のマチ部分．．．。ただこんな孤島だからお店も無いし．．．。仕方ない．．．。(泣)

そして、ブラの代わりは、サラシを胸に巻いている．．．。

今日は、鮫島の農園を手伝いに行くので、スリムタイプのTシャツと麻のチェックのシャツと短パンと長靴と麦わら帽子を借りた。

何故か鮫島の短パンを借りると、瑞穂には七分丈のパンツになってしまう．．．。

そして、ウエストが落ちそうなので、サスペンダーを借りて吊りズボンにしている。

長靴は、鯨島の足は28cm、瑞穂は23cm……。ちょっと大きくてガボガボだ……。

そして麦わら帽子の中には日除けとして日本てぬぐいを借りて頭に被ってから麦わら帽子をかぶって……。

……これがどう見ても トム・ソーヤいや……。ハックルベリー・フィンに見えるらしい……。  
ちえっ……。どうぞ笑って下さい……。いいもん。

ブスツとすっかりへそを曲げた瑞穂の様子に気がついて、鯨島が無理矢理 真面目顔を作った。

「いやあ……。悪かった！ じゃあ農園に行こう……。そうだ注意事項があるからちゃんとして頭に留めて置いて、十分気をつけるように……。」

「はい!!」

何だろ……。緊張する!!

鯨島が図鑑を数冊持って来て、ふせんの貼ってあるページを次々開いてテーブルに広げた。

「ニホンマムシは知ってるかい？ これなんだがね……。」

……鯨島さんの説明では、この辺りで注意する主なへびは、マムシとヤマカガシ……。

一応畑は囲いをつけてネットを張っているそうだが、ネットも楽々乗り越えて時々進入してくるそうだ。

ヤマカガシは毒が無いと思われていたが、毒牙は奥歯にあるため深く噛まれないと毒の注入が行なわれ無い為、謝った認識をされてい

た為で、実際には数は少ないが噛まれて亡くなられた人も居るそう  
だ．．．。(汗)

あとはキイロスズメバチ、オオスズメバチ．．．。オオスズメバチ  
は山の中の土の中に巣を作ったりするそうで、うっかり足を踏み入  
れては大変な事になるそうだ．．．。(恐)

あとはヒル．．．。山には山ヒル、川にはヒル．．．。海に生息する  
種類もいるそうだ．．．。(恐×2)

その他．．．マダニ、ツツガムシ．．．etc．．．。(恐怖!!)

「えええーっ!!なんだか恐ろしくなってきました」

「まあ．．．危険な場所は俺が熟知してるし、そんな危険な所に瑞  
穂君を連れて行ったりはしないし、そんなに心配しなくても大丈夫  
さ!! とにかく慌てず騒がず．．．危険と遭遇したら静かに速や  
かにその場所を離れる事が鉄則だよ。基礎知識として瑞穂君に話し  
ただけだからね」

「はいっ!!」

「ちよつとホツとした．．．。まあ気をつけてれば大丈夫ね!!」

「たーだーし!!俺を怒らせたらどうなるか分らないぞ!!超危な  
場所に置き去りにするかもな．．．」  
またニヤリと不敵な笑を漂わせる鮫島．．．。

「でたーっ!!鮫島さんの毒舌シャーク攻撃!!」

「ど．．．毒舌シャーク?!」

「ちよつと驚いたその顔がイケテル!!なんて思ったりして．．．。

「そうです!! 鮫島のサメと、毒舌を合わせて、毒舌シャーク攻

撃！！」

「瑞穂君も大分進歩したじゃないか！！じゃあ畑に行くか・・・ハツクルベリー・フィンのハック君！！」

フフツと笑って、瑞穂の被ってる麦わら帽子をポンポンと軽く手でたたいた。

「はいっ！！シャーク隊長」

瑞穂は足を揃えて、肩手を頭部に当てて敬礼した。

\* \* \* \* \*

鮫島ファームと書かれたプレートの下がった農場に付いた。

ファームは、小動物やへびなどの進入よけのネットフェンスでぐるりと囲まれ、木のオシャレなログハウス風でウッドデッキのついた農作業小屋があり、ウッドデッキには木のテーブルとベンチ椅子が置かれてて、サンシェードの折り畳み式の屋根もついている。

農作業小屋の脇には水場があつて、川から引いてきた澄んだ水がチヨロチヨロと、石を積み重ねてコンクリートで固めた石の桶に流れ込んでいて、石の桶は、郡上八幡の水船のように、3段になっていて、1番目が野菜などを冷やしたりする所、2段目が手や野菜を洗う所、3段目が泥で汚れた農具を洗ったり、足を洗ったりする所・・・。それ以外にもう一つ別に石桶があり、そこからポンプで水を引いて時間が来ると散水栓で畑に水を撒くようにしてあつた。

見慣れたキュウリ、トマト、茄子、ピーマンなどの夏野菜に、メロン、スイカ、パッションフルーツなどの果物。

サラダ菜、山東菜、小松菜などの青野菜・・・。アシタバなどあまり見た事の無い物も植えられている・・・。



「凄いですね！！これを全て鮫島さんが1人で？」

「いや．．．実は助手のような者達が入れ替わり立ち替わりここにやって来ては、数日滞在して色々手伝っていつてくれるから、実際、1人という時間はそれ程多くはないかもしれないな．．．。彼達が何かと手伝ってくれてね．．．。やはり1人で全てを賄うというのはキツイからね．．．。何かと助けられてるよ．．．。俺は本当に恵まれてると思う．．．。今度やってくる船でも3人ここにやってくるはずなんだ．．．。」

「そうなんですか．．．。」  
「なんだ．．．。やっぱりここで1人で生活なんて大変なものね．．．。それに人の出入りが多いのなら、淋しいって事も感じないわよね。今度の船で人が来たら、ちよつと淋しいなと思った．．．それはなんでなんだろう．．．。なんでかな．．．。鮫島さんの生活が楽しいから？それに私は今度来る船で本土に帰らなくてはいけないのよね．．．。なんだか胸がキュンとした．．．。」

「よしっ！じゃあ早速、雑草とりから始めてくれ．．．。間違つて野菜の苗を抜くなよ！！！」

「はっ！シャーク隊長！！」  
瑞穂はまた敬礼をした。

「ハック君頑張りたまえ！！」  
鮫島もにこつと笑った．．．。

．．．．ああ．．．その笑顔眩しすぎる．．．。

瑞穂は、余計な事を考えないように、一生懸命草取りをした。農作業なんて初体験だけれど．．．楽しい．．．自然の中で土いじり．．．凄く楽しいな．．．。

「やっぱり女の子だと細やかで、仕事が丁寧で、いいねえ．．．」  
瑞穂の様子を見て、鮫島がポツリと言った。

「えっ？」

「ここにやって来るのは殆どが野郎どもだろう？ やる事が雑でね．．．。瑞穂君は一つ一つ丁寧に根っ子まで雑草をとってくれて．．．助かるよ。農作物と違って雑草は本当にしぶといというか大変なんだ．．．。取り残したらどんどんまた増えるし．．．種でも根っ子からもまた広がっていったね．．．。こうやって一生懸命取り去ると、次からは生えにくくなって、いい作物が出るんだ．．．」  
手を動かしながら、顔だけこちらに剥けて微笑む鮫島の笑顔が凄く優しくて、瑞穂は胸がキュンとした。

「こ．．．こんな私でもお役に立つ事が出来て凄く嬉しいです」  
軍手をはめた手で、顔の汗を拭き拭き、一生懸命頑張った。  
いいなあ〜こんな生活．．．。まるで夢みたいだな．．．。

「さあ．．．そろそろ休憩でもしようか．．．。適度に休憩しないと熱中症になるからね．．．」  
鮫島はいつの間にか、畑からスイカを収穫して先程の石の桶の水場に浮かべて冷やしておいたらしく、そこから冷えたスイカを持って来て、農作業小屋の前のウッドデッキの木のテーブルに置いて、小屋からまな板と包丁を持って来て、さっくりとスイカを切り分け始めた。

「ほら水場で顔と手を洗ってきて．．．」

「あ．．．はい」

瑞穂は慌てて手と顔を洗い、ベンチ椅子に腰かけた。

「いいですね．．．こんな大自然の中の生活って．．．なんだか鮫島さんが羨ましいです。そりゃ．．．大変な事も沢山あると思いますが、自然と一緒に共存共栄って言うか．．．。大自然の中の生活ってこんなに素晴らしいんだって．．．少し分って来たような．．．」

「そうかい？この程度の事は、まだまだ触りぐらいかな？

ここには、いい所がいっぱいあるんだよ．．．。迎えの船がやって来るまでまだ10日あるから、その間ここで生活を思いっきり堪能してくれたら嬉しいよ．．．」

「はい．．．」

ああ．．．やっぱり、あと10日で帰らないといけないんですね．．．。

ちょっと落胆したような淋しい気持ちになった．．．。

そうですね．．．私がここにずっと滞在したら、研究のお仕事も進まないし、ご迷惑ですよ？

10日間、思いきりこの生活を楽しもう．．．。瑞穂はそう思った。

(第5話に続く)

## 第5話 島生活・その2 『山へ．．．』

「では、行こうか．．．」

「はいっ！」

今日はどんな事があるだろう．．．毎日ドキドキ楽しい事ばかりだ。今日はちよつと重装備．．．。

長袖、長ズボンに軍手にメンズキャップ．．．。

私は、鮫島さんのメンズパンツを1枚頂いて、私の足の長さに合わせて短足仕立てにパンツをカットした長ズボンを履いている．．．。

鮫島さんは大きなりユックサックに水筒に、投げ網とクーラーバッグ．．．。私は空っぽの背負い籠にたすき掛けしたバッグと水筒．．．。

今日は山に食材を取りに出かける．．．。

ヤマモモや、木イチゴ、キノコ類、タラノキ、ゴマナ、ヨモギ．．．。

それに途中の川では、川魚も釣れるし、川海老もとれる．．．。

ここは本当に自然の恵みの宝庫という感じだ．．．。

鮫島邸はこんもりした山の麓の平地にあり、家の裏手の山が途切れて風が多く集まる所に中型の風力発電機が2機回っている。家の裏手の少し離れた場所にある為か、家の中や周辺からは羽根の回る音は全く気にならない．．．。

だけど家の裏手に回って風力発電機近くまでしばらく歩いて行くと、結構羽根の音が気になる．．．。

一般論的に、人が不快になる周波数の音を発しているとも言われて、設置する場所を誤ると、時に、低周波騒音公害で騒がれ、実際に公

害問題も起きている。何でも利点もあれば欠点もある．．．それを上手に使えば、いい結果が出せるという事なのかなと思う。ここでいい結果が出せてるといふ感じかな？

家の正面から見ると、家の裏側に真っ白な羽根がくるくる回ってるように見えて、なかなか味わいのある素敵なお風景だ。

その風力発電の手前には鉄の箱のような水力発電機がドンと設置されている．．．。

上流からパイプで水を引いて、この機械に通して水の力でタービンを回転させて発電させ、水はまたパイプで下流の川に戻している．

。このタービンの音も結構いい音だ．．．。

そして大きな蓄電システム機が設置されて、自然の恩恵を受けて出来上がった、貴重な生活資源である、電気を貯めておくシステム．無駄が全くないという感じだ．．．。

研究棟には大きな水槽が沢山あり、貴重な生物を飼育してるし、様々な機器などが常に動いている状態なので、停電が起きたら大変な状況となってしまう．．．。だからこんなに重装備なのだろう．．．。

家の広い窓から正面に見える景色は一面青い海の大パノラマ．．．。海から見ると、少し上った頑丈な崖の上に建てられているので、家からは直に広がる海の景色が見える。

好立地な場所に家が建っている事になる．．．。

家の脇から裏手に歩いていくと山へ．．．家正面のスロープを下りて行くと海岸や岩場や桟橋へ．．．。家脇道の平地をそのまま進んでいくと畑に出られる．．．。

後で気がついたが、ここにはヘリポートがあり、格納庫もあった．．．。

格納庫にはシャッターが下りているので、良く分らないが中にはへりが入ってるのだろうか？

緊急の時にはここから本土に行くのかもしれない．．．。

鮫島さんってお金持ちなのだろうか？ ただの研究者とは思えない  
スケールの大きさだ．．．。

割烹着姿で料理したり、普段の生活からはそんな風には見えないの  
だが．．．謎めいた所のある人だ。

まあ．．．そんな事は私には関係のない事だし．．．この島を出た  
らもう関わる事のない人だ．．．。

なんだか淋しいけれど．．．この島での事は全て夢物語で、本土に  
戻ったら現実の世界に戻るといふ事なのだろう．．．。

．．．．．2人して赤い小道を進む．．．。

山には赤砂利を固めた程良い傾斜の小道がずっと続いていて、これ  
が赤い小道．．．。

わりと歩きやすい。赤い道をずっとたどっていけばいいのだから、  
迷う事もなさそうだ．．．。

「赤い小道をたどって進んでいくなんて！ちょっとオズの魔法使い  
みたいですね．．．。あれは黄色いレンガの道だったと思いますが  
．．．。傾斜も緩やかで歩きやすいですし、なんか楽しいです」

「そうかい．．．。油断しているとジャングルになって道が埋もれて  
無くなってしまうし、1人で山に入って道に迷っても誰にも救助し  
てもらえないし、分り易くしようと思つて一応山への道はちゃんと  
整備してみたんだ．．．。」

「これなら道をそれなければ、不慣れな私1人でも大丈夫ですね！  
」

「そうだね．．．。だけど時々、赤い道の上でマムシが休んでいた  
り、危ない事もあるからね．．．。気を抜いてはダメだよ！！」

「は．．．はい」

途中時々赤い小道を外れ山に入って行き、豊富な食材を収穫しながら、滝の広場を目指す．．．。

鮫島の頭の中には、この辺りでは何が採れるとか、全てインプットされてる感じだ．．．。

昼少し過ぎに、滝の広場に到着．．．。

森に囲まれた幅10m程の円形の浅い池は、太陽の光に反射してキラキラと輝き、水はとても澄んでいて川底まで良く見え、白いサラサラとした砂に、所々水に削り取られたのかまあるい形の大きな石や岩が転々とし、所々青々とした水生植物がユラユラゆらめき、沢山の川魚が泳ぎ回るのが良く見える。

池前方には、高さ5メートルぐらいの急傾斜の岩が塀のようにそそり立ち、そこから岩肌を伝って、絹糸の様に真っ白な細い滝水が幾重にもなあって池に注ぎ込まれ、その水はやがて、緩やかな川となつて下の方へ流れて行く．．．。

池に流れ込む滝水は、霧状になって、幻想的な虹が時々ぼんやりと浮かび上がってくる。

「わあ．．．素敵．．．美しいですね．．．あまりにも美しすぎて表現出来るような言葉が浮かんできません」

「ここは絶対に見て欲しいと思っていた場所なんだ、俺も初めてこの場所を見つけた時には言葉が出ないぐらい感動したよ．．．」

「本当に．．．いつまでも見ていたい景色ですよね．．．離れたく無いって言うか．．．」

「じゃあこの素敵な景色を見ながら、お昼にしようか．．．」

「はい」

池の辺の平面になった所に、屋根の付いた東屋があり、木のベンチとテーブルに、薪式のレンガで出来たバーベキューコンロが設置されていた。

「すごーい！！こんな休憩所が・・・」

「ゆつくり座りながら景色を楽しみたい衝動に駆られてね。自然を壊さないように気をつけながら、少しづつコツコツ手を加えて、ちよつとした休める場所を作ってみただ」

「鮫島さんの手に掛かると、自然と上手く調和しながら、全てが素敵な感じに変えられていくって感じですね。

天然の美しい絵画を思いつきり楽しめるって秀囲気で・・・。ここに来た人にしか味わえない贅沢ですよね・・・」

「じゃあ、天然の絵画を楽しみながら、お昼にしようか？」

「はい！」

お昼ご飯のメニューは、大きな鮫島の手で握った少し大きめの塩おむすびに、保温器に入れて持ってきた固めに茹でた野菜が沢山入った汁物・・・。

鮫島は、先程とったキノコを池の水でサツと洗って、手で千切って汁物の中に放り込んだ。

それから乾いた枝を掻き集めてバーベキューコンロに入れ、火を燃やし、即席キノコ汁を作った。

キノコ汁を煮ている間に、投げ網で川魚をとって、その魚に塩を振



ってコン口の端で焼き魚．．．。  
その手際の良さに、瑞穂は見惚れてしまう．．．。

取れたて、焼きたての魚のおいしい事．．．。

「こんなおいしい魚初めて食べました」

「ここでしか味わえない、最高のご馳走だよ。瑞穂君は本当に美味しそうに沢山食べてくれるから、こっちも嬉しい気持ちになるよ。見ていて清々というか．．．いいねえ．．．」  
頬杖突いて、ニコニコとした顔で見つめられるとドキドキしてくる．．．。

「鮫島さんのおいしい料理だから、美味しく頂けるんですヨー！！私、ここに流されてきてから、生きてて良かったー！！ 最高！！ っって毎日思います。 本当に幸せです」

「そうかい．．．こちも嬉しいよ．．．こういう生活が苦手って言う人も中には居るしね．．．。俺はいい目つけもんの漂流物を拾ったかもしれないな！！」

「でしょーっ！！ここにずっといてあげましようか？」  
半冗談で言ってみた．．．。私の本心を．．．。

「いやあー。それは勘弁かな？」

「あ．．．。やっぱり？ あはははは．．．。そうですねー」  
笑いながら心で泣いた．．．。帰りたく無いけどやっぱり帰らないといけないんですね．．．。（泣）

（第6話に続く）



## 第6話 島生活・その3 『海でハプニング』

十六夜島にやって来て、あつという間に2週間が過ぎた……。あと6日で迎える船がやって来る。

もうかなり島の生活にも慣れ、畑や山に作業や収穫にも1人で出かけられるようになった。

危険な事も滅多に遭遇する事は無いし、マムシぐらいだったら棒切れで追い払ったり、去って行くのをジツと待っていれば大丈夫！こちらが攻撃しない限り襲ってくる事は無いし……。何と言っても鮫島以外人は居ないので、日暮れ時でも痴漢や暴漢に襲われる危険も無い……。

言ってみたら世界一治安のいい場所なのではないかなとも思えて来る。

ああ……。本当にいい所で帰りたくないなあ。

今日は、午前11時に干潮で遠くまで潮が引くので、潮の引いた岩場で貝採りと……。ラッキーならウニも夢ではない？

ワクワクしながら岩場に向った。

鮫島は用事があるので、後から来る事になってる。

何度か一緒に採りに行ったので、要領も分ってるし、危険な箇所とか、気をつけなくてはいけない注意事項も聞いてるし、自然にこうやって触れてきて、自然を侮ってはいけない事、無理をしない事など色々教え込まれてきたし、その事を守っていれば1人でも大丈夫！！

採取は大量に取らずに、食べる分だけ採るのが鉄則……。そうすれば、苦勞しなくても次回もまた同じ所で採取する事ができるし、数が減ったり生態系を壊す事もない。

今日は1人なので、やはり小物の貝しか採れない……。

「まあ、味噌汁のだしぐらいにはなるかな？」  
バケツの中の収穫物を覗いて、苦笑した。

鮫島の借り物の長靴なので、どうしてもガボガボで時々ずぼ抜ける  
。。。

鮫島は後から来ると言っていたが、なかなか来ないし、だんだん潮  
が満ち始めたので戻る事にした。

バケツを持って戻ろうとした時、長靴の肩足がスッポ抜けて、自分  
の足で直に何かを踏みつけてしまった。。。

靴下は履いていたが、その途端飛び上がるぐらいの激痛が襲ってき  
た。。。

「あ。。痛っ。。。」

なんだろうと思ったら、黒い長い棘のウニのような物だった。。。  
縫い針が刺さった感じではなくて、焼けるような痛み。。。

素足で戻る訳にもいかず、とにかくまた長靴を履いて、真っ青にな  
りながら足を引きずり引きずり家に向う斜面の道まで戻って来た。

もう痛すぎて、顔面蒼白。。目も涙目状態。。。

ヒュー言っ感じで、体を引きずるように斜面の道を上っていたら、  
上から鮫島が下りて来る姿が見えた。。。

一目見て、様子が変だと感じたようで、慌てて走って来た。

「どうしたの？」

「さ。。鮫島さん。。長靴が脱げて足を置いた丁度その下にウ  
ニみたいな物がいて、踏みつぶしてしまいました。。。」

我ながら情けない。。死にそんな声だった。。。

「え。。ちよつと見せて!!！」

その場にへたり込んで、靴下を脱いで足を見せる。。。

「これは．．．ガンガゼだな．．．急いだ方がいい．．．持つてる物はここに置いていって．．．後で俺が取りに戻るから．．．すぐに家に帰ろう！！」

そう言うとヒョイと抱き上げられて、慌てて家に戻った．．．。

『キヤーツ！！』 足が死にそうに痛いのに、心臓が時めいてしまつた．．．。

いとも軽々と抱き上げられて．．．ふんわりと男の人のいい香りでした．．．帰らないといけないんだから好きになっちゃダメ！！

時めいちゃダメ！！何度も何度も自分に言い聞かせた．．．。

．．．．．ガンガゼとはウニの一種で、長い棘に毒があり非常に折れやすく、棘は人の体に容易に刺さりやすい。

棘が刺されると激しい痛みをおこし、棘の表面に逆刺があるので、体に入るととれにくい。

刺傷は強い灼熱感、発赤、腫脹を経て疼痛を増す。重症の場合は手足筋肉の麻酔や呼吸困難を起こし、場合によっては命を落とす事もある。

家に着くとすぐに足を真水で洗って、少し熱めのお湯に1時間浸けながら、毒を搾り出すようにする。

「ガンガゼの棘はとても折れやすくて体に残るから、あとで切開して取らないとダメだな．．．」

鯨島がアツサリとそんな恐ろしい事を言うので、瑞穂は仰天した．．．。

「ええーっ！！そんな事したら私死んじゃいます．．．」

「麻酔があるから、大丈夫だよ」

「絶対に痛くないですか？」

「絶対と言うのは無理かもしれないが．．．」

「ええーっ！ー！やっぱりやめます、このままにしておきます」

「ダメだよ、とらないと．．．」

「絶対に取らないとダメですか？」

「絶対ダメ．．．」

「．．．．．そして．．．」。

「良く頑張ったね！！」

まるで子供みたいに、いい子いい子されて、ちょっと凹む．．．。

「あんな恐ろしい目にあうのは、もう二度とゴメンです！！　とて  
も痛かったですよ」

「麻酔したからそんなに痛くないはずだよ！！」

「麻酔の針を刺す時、凄く痛かったです！！」

「それはどうにもならないな．．．それに絶対と言うのは無理かも  
しれないって言ったし、嘘じゃなかったでしょ？」

「もう．．．貝採り懲りました．．．。もう家で大人しくしてます。  
あと6日で帰るんですし．．．」

「この島の生活嫌になっちゃった？」

「嫌じゃありませんけど．．．何やっても役立たずで．．．」

「そんな事ないよ．．．とても役に立ってるよ」

「どこがですか！ご迷惑ばかりかけてますし．．．」

「今日の事は、運が悪かったただだよ．．．俺も結構しくじったりしてるしね．．．」

「完璧な鮫島さんが、しくじるなんて想像できません」

「いや．．．失敗あってこそ次に生かせるから．．．今日の事で、全て嫌になって欲しくないな．．．」

「全て嫌になんてなりませんけど．．．でも．．．もうすぐここを離れなくてはいけませんし．．．そろそろ言う心の準備をしないと淋しくなっちゃいますし．．．辛いですし．．．」

「え．．．」

ちよつと驚いた顔をした。

「いえ．．．何でもありません」

「島の生活は、今日みたいな目にあったり、大変な事も多いし．．．ずっとここで暮らすのはキツイでしょう?」

「ここに来て、本土に帰りたいつてホームシックになった事は一度もないです．．．でも．．．いつまでも私がいるとご迷惑ばかりかけて、鮫島さんの仕事が捗らないでしょうし．．．帰らないと．．．」

「.

「もし．．．本気でここで暮らしたいって言うのなら、構わないよ」

「それ、いつものご冗談ですよね？」

「いや．．．本心」

「本当に？」

「いいよ．．．」

「本気になって居着いちゃいますよ」

「いいよ．．．。瑞穂君今、寿退社して、プー太郎なんだよね？  
俺の助手としてここで働くかい？」

その言葉に飛びついて、間を問わずに答えた。

「はいはいはい．．．是非．．．お願いします!!」

「そんなにここに居たかったの？」

「もうずっと前から．．．ここに来た時からずっと．．．」

「君がここに居たいって話し、本心なのかどうか分らなくてね．．．  
つれない返事ばかりして悪かったよ．．．」。

君の気持ちは良く分ったから．．．好きなだけ居て構わないよ。但  
し．．．一度本土に帰って、君の両親と会ってここで働く事の許可  
をとってからだよ．．．。心配してると思うし．．．。あとは服と  
か生活用品を全て準備してね．．．。それから給料はあまり期待出



来ないと思うよ。生活費、宿泊費、食事代全て無料だけどね!!  
給料はそうだな・・・月給18万ぐらい・・・。ボーナスも出ないよ・・・それでもいいのかな?」

「はい・・・。もうそれで十分です!! 本当に荷物持って、すぐに戻って来ちゃいますよ!!」

鮫島がクスリと笑って・・・。

「嬉しいね・・・そんなに気に入ってくれてたなんて・・・。いいよ! 今度来る船は、本土に戻ったら、2週間後にまたこっちに来る予定になってるから、それに乗って戻っておいで・・・。」

「はい・・・。絶対に来ます!!」

「待ってるよ!!」

「はい!!」

・・・ああ・・・本土に戻るのももう淋しくない・・・。希望の光が見えて来た・・・。

(第7話に続く)

第6話 島生活・その3 『海でハプニング』（後書き）

淡々としたストーリー展開がずっと続きます・・・あまり期待しないで下さい・・・m（――）m  
大自然の中の暮らしに憧れて、こういう話しを書いてみたいなと思ってました。

## 第7話 島生活・その4 『満天の星の下で』

ガンガゼ事件のあったその日の夜は、気持ちが高ぶってしまったのか、なかなか寝つかれなかった。

それとも、一旦本土に戻るにしても、またこの島に戻って来れる事が決まって、嬉しくて興奮してるのだろうか？

ここで私に何が出来るのだろうか？何の役に立つ事が出来るのだろうか？あれこれ思う。。。

ガンガゼの棘が刺さったのは、右足の「内側足根小球付近」（土踏まずと指の間）と足の親指と中指の付け根で、今は包帯グルグル巻き状態。。。。痛みは大分治まったが、少し切開して棘を全て取ったので、まだズキズキ痛む。

やはり痛みで寝つかれないのか。。。今日は全然睡魔が訪れない。。。諦めて眠くなるまで起きて居る事に決めた。

何となく星空が見たくなって、傷の部分を浮かせて、踵歩きでテラスの木のブランコに座った。

家のライトが落ちると、回りに明かりとなる物は殆どない。。。。。棧橋のミニ灯台と、山の上に島の目印としてか？ 標灯が付いている。

あとは一面真っ暗闇で空を見上げると物凄い数の星々。。。。。

この島にきて自然の雄大さと、神秘と素晴らしさを知った。

ここから見る満天の星の素晴らしさも。。。。。

「どうしたの。。。寝れないの？」

瑞穂の気配で起きてしまったのか、いつの間にか後ろに鮫島が立つ

ていた。

「あ．．．鮫島さん．．．すみません。起こしちゃいましたか？」

「いや気にしなくていいよ．．．。足が痛くて寝れないのかな？」

「痛みの方は大分治まってきましたが、なんだか今日は寝れなくて．．．」

鮫島がにっこり笑って、瑞穂の隣に座る。

「俺も暫く付き合おうよ」

「あ．．．はい」

なんだかちよつと照れる．．．。

「ガンガゼだけど．．．実は俺も、刺さった事があったね．．．。自分で傷口をほじって棘を全部取った事があるんだ．．．」

「うわあ．．．。自分で？凄く痛そうですね．．．」

「いやあ．．．あれは痛いよね。島の痛烈な洗礼を受けた気分だよね．．．。瑞穂君もガンガゼの洗礼を受けたし、これで一人前の島民だね．．．」

「アハハハ．．．。かなり厳しい洗礼ですよね」

「こつという自然の中の生活だから、この先も怪我したり色々パプニングもあるかもしれないけど、覚悟は出来てる？」

「どんな事が起きるのか？ちよつと恐いですけど、楽しい気持ち

の方が大きいです。

何かあった時には凹む事もあるかも知れませんが、それ以上にワクワクする気持ちの方が大きくて、どんな事も乗り越えられちゃうような気持ちなんです。

私．．．この島の事を知らない以前の自分の生活が、チマチマしてるとっていつか．．．なんて小さな世界だったんだらうって最近思えて来るんです。そのぐらいここでの生活は楽しいです」

瑞穂の言葉に鮫島が嬉しそうに微笑んだ。

「いやあ〜。瑞穂君は素晴らしい！！俺も嬉しくなるな．．．。君は優秀な助手になりそうだ」

助手と聞いて、ちょっと身が竦む。

「でも．．．。私．．．鮫島さんのように、専門的な知識が何もありませんし、私に何が出来るのだらう．．．実際、どんなお役に立つ事が出来るのだらうって．．．正直不安です。いつも思い返して見たら、迷惑ばかりかけてるような気がしてます．．．」

「そんなに力まなくてもいいよ．．．毎日の畑の世話や、小動物の世話、島内の自然の食料調達とか、ちょっとした手伝いで十分助かってるし、やはり人の出入りは多いと言っても、1人の時も多いし、瑞穂君がここに来てくれていい話し相手が出来て、それだけでも凄く助けられてるんだ．．．。」

「そうだね．．．また少しづつ、瑞穂君に出来そうな事をお願いしていくと思うし、まあ．．．そうやって色々覚えてもらって、手助けしてくれたらでいいから．．．」

「はい．．．頑張ります！！わあ．．．ワクワクです．．．」

「しかし．．．こんなに気に入って貰えるとは俺も思わなかったよ。」

船が来る前に、早く本土に帰りたい！！って泣き付かれるかと思  
ってちよつとドキドキだったけど．．．。瑞穂君は、根性はあるし、  
働き者だし、うん．．．素晴らしいね！！」

「わぁ．．．。うれしいお言葉です」

それから暫く黙り込んで、2人で星空を見上げる．．．。

「あの中央に三つ星が並んでるオリオン座．．．。あそこに赤い星  
があるでしょう？」

鮫島が指を差す方を瑞穂が一生懸命見て探す。

「ああ．．．あります、あります．．．」

「あの赤い星は”ベテルギウス”と言ってね、星の一生の99.9  
%が終わっているって言われてるそうなんだ．．．。明日爆発して  
もおかしくない星らしいよ。」

「えーっ！！大丈夫なんでしょう？」

「地球には全く影響無いと言う説と、地球の生命体に影響が及ぼす  
可能性があるという説を解く学者も居るそうだが．．．。運が悪け  
れば、超新星爆発の時に、ガンマ線という強烈な放射線が放たれて、  
地球のオゾン層を破壊して、太陽の有害な紫外線が地球にバンバン  
降り注いで、生命体に影響を及ぼすらしいよ．．．」

「その話し恐すぎます．．．」

「ハハハ．．．まあ、ベテルギウスの自転軸の向きが重要で、丁度  
地球に対して軸が20度ずれている事が分って、まず影響はないで  
しょうという事に落ち着いたけれどね．．．」

「ほつとしました．．．。とり合えず大丈夫って事なんですネ．．．」

「まあね．．．。だけど、その大切なオゾン層を破壊し続けているのは俺達人間だからね．．．。このまま何もしないとそのうち人間は地球に住めなくなると言うか、滅んでしまうよね．．．。」

「そうですね．．．。二酸化炭素大量放出による地球温暖化．．．。フロンガス、メタンガスによるオゾン層破壊．．．酸性雨、大気汚染、異常気象．．．それによる災害」

「タンカー事故による重油流出とか、海洋汚染も進んでるし、太平洋の真ん中には海洋に漂ってるプラスチックの破片などのゴミの吹き溜まりになった”太平洋ゴミベルト”という所もあってね．．．。集まったゴミの量が400万トンとも言われてるんだ．．．。」

「恐ろしいですね．．．。」

「本当は、はるか昔のような生活を送るのが一番ベストなんだろうね．．．。今となってはそれは無理だろうけどね．．．。少しでも食い止める事が出来るように、いい方向に改善出来るように、1人意識して生活を変えないといけないね．．．。」

「そうですね．．．。」

「俺自身、環境を破壊している行為を行ってる時があると思うし．．．。偉そうな事ばかり言って、なんだコイツ！って言う事もあるかも知れないなって思うよ．．．。文明の利器には抗えない時があるし．．．。でも、自分で出来る事は努力しようって意識してるつも

りなんだ……。便利で環境破壊する物には出来るだけ頼らないで、日々生活するようにな。……。頑張る!!」

「素晴らしいですね……。私も、意識します!!頑張ります!!」  
瑞穂が宣誓のように手を上げて言った。

「お互いに、意識しようね!!」

「はいっ!!」

うん。やっぱり鮫島さんは……。素敵……。

ああ……。目がハートになっちゃう……。

(第8話に続く)



## 第8話 あの日的事・・・

.....ここに流れ着いてから19日め.....。明日はとうとう本土に帰る日だ.....。

船は朝8時に東京を出たと連絡が入ったので、午後4時ぐらいに十六夜島に到着予定だ。

天気も良く、波も穏やかで、航行は順調の様子だ.....。

船はいつも知り合いの業者から、中型船をチャーターして、郵便物や生活物資等輸送、十六夜島を訪れる助手達などを乗せ、定期的に往復してもらってるそうだ。高速船ではないので、東京から片道8時間かかる.....。

船はこちらに一晩停泊して、明日の朝、東京に向けて出発する。

瑞穂はふと思い返していた.....。

ここに帰って来てもいいと言って貰える以前の時には、時々船が永遠に來なければいいのにと、いけない事を願ってしまう事もあった.....。ここを離れるのは少し淋しいけれど、また戻って来れると思うとそれ程苦にならない。

「準備は大丈夫かな？って言っても、持って行く物は何もないんだよね.....。」

鮫島が困り顔で照れながら頭を掻いた。

「はい.....。見事に身ひとつ船に乗ってやって来たって感じで.....。あの時持っていたバッグは船の外に転がったみたいで、翌日あの海岸に流れ着いて発見されたそうです。それで自殺だって大騒ぎで捜索までされたみたいで.....。

その騒ぎの事を思うと、本土に戻るのがちょっと恐い気もします。親や迷惑をかけてしまった人達に、どんな顔して会えばいいのか.....。

。「心臟が凍りつきそうです」

「事故に遭遇したような物だし、あまり気にしないで、大丈夫だと思っよ．．．。君のご両親は生きていて本当に良かったって喜んでくれてるし．．．。」

「はい．．．。うちの両親ですが、鮫島さんにとっても感謝してました。私もなんてお礼を言っていいのか．．．本当に命の恩人です．．．。」

「本当にこんなに元気になって良かったよ．．．。」  
「．．．鮫島はあの日の事を思い返していた。」

\* \* \* \* \*

朝、いつもの日課で海岸を散歩していた時の事だった。

前の日は風が強く、色々な物が砂浜に流れ着いて打ち上げられた．．．。たまには海外の物なども流れてくるが、殆どが本土から流れてきた物だ．．．。大きなドラム缶や、船の大きな浮きとか、プラスチック製のゴミなど迷惑な物が殆ど．．．。

「全く．．．これを片付けるのが大変なんだよな．．．。」  
ふと見ると、定員2名、全長3．5m程の小型ボートが転がっていた。

「こんな物まで流れて来たのか!!」

流石に驚いたが、まだ使えそうだな．．．と思った。

「船体識別番号で持ち主が分かるか．．．こんな大きな物は、本土まで返しにいけないし、ここまで取りにきて貰うしかないな．．．。」

ふと船の中を見たら、人が居て心臟が凍りついた．．．。

それも若い女性．．．あちこちぶつけて服も破けてて、体中擦り傷だらけだ．．．。

．．．．．とても生きてるとは思えなかった．．．。

いくら医師免許を持つているとは言え、こういう遺体に遭遇するのは勘弁だ．．．。

一度呼吸を整えて、自分自身に気合いを入れ、覚悟を決めてから近付いた．．．。

彼女の頬をそつと触れてみたら、冷たかった．．．。

「やはり死んでるのか．．．」

だが、つぶつている脛がほんの僅か動いた．．．。

「ええっ！！生きてるのか？」

信じられなかった．．．本土から流れてきたのなら、12時間以上1日近く漂流していた可能性もある．．．。

低体温に脱水症を起こしてる感じだ．．．船の中に缶ビールが転がってる．．．急性アルコール中毒を起こしてるかもしれない．．．。

抱きかかえて、家に慌てて連れて行き、毛布で体を温め、点滴、体をマツサージ．．．。

時々海水が船の中に流れ込んできたのか、髪の毛は海水の塩でバリバリ．．．。

症状が安定してから、髪の毛を洗ってやり、体を温かいタオルで綺麗に拭いてあげた．．．。

着せる物が無かったので、自分のパジャマを着せた。

発見した時にはドロドロで悲惨な状態だったので分らなかったが、色白の綺麗な肌の可愛らしい子だった．．．。

鮫島はぼつりと彼女に呟いた．．．。

「ここまでたどり着いて、命を落とさなかったのは奇跡だよ．．．助かって本当に良かったね．．．。いったいなんでこんな所まで君は流れて来たんだ？」

そつと髪の毛を優しく手でなでた．．．。

．．．．それから目覚めた彼女は、更に可愛かった．．．。  
淡い茶色の大きな瞳．．．長いまつ毛．．．。  
凄く素直で一生懸命だった．．．。あの海蛇の蒲焼きを美味しい、  
美味しいと、お代わりした後、実は海蛇だと知った時の顔．．．。  
笑える．．．。

山に行く時の、ハックル・ベリーフィンのような姿．．．。

瑞穂がここの生活をとても気に入ってる様子も何となくは分っていたが、一過性の物ですぐに本土が恋しくなるだろうと初めはつれな  
いそぶりを見せたが．．．。  
いつの間にか、彼女がここから居なくなってしまう事が凄く淋しく  
感じて来てしまった．．．。  
ずっと居てくれないかなと．．．。  
ここにずっと居たいという気持ちが、本心だと分った時の喜びと言  
ったら．．．。  
ついつい思い出して、うつかりにやけてしまった。

「鮫島さん、何ニヤニヤしてるんですか？」  
怪訝そうな顔の瑞穂。

「ねえ瑞穂君、初めて俺を見て言った言葉、覚えてるかい？」

「うん。なんででしょう？ 助けてくれて、ありがとうございました。かな？」

「ぜんぜん．．．。」

「えっ？ じゃあ何ですか？」

鮫島が瑞穂の真似をして、声を裏返して言った。

「へ．．．変質者?!」

目が点の瑞穂．．．。

「まったく．．．命の恩人に、瑞穂君は酷いよな．．．」  
ちよつと拗ねる鮫島。

「あゝっ!! 思いました．．．。鮫島さんはこう言ったんです  
よね．．．。」

今度は瑞穂が、鮫島の真似をして、目を細めて怖い顔をして低い声を出す。

「馬鹿者!! 何が変質者だ!! それはお前だろう!! 泥酔状態で人の島に勝手に漂流してきて．．．。家宅侵入罪で訴える所だぞ!! それに俺は医師として仕事はしてないが、医師免許も持ってるし、卒後臨床研修も終えてるし、医療行為を行ってもなにも問題は無い身だ!!」

お互いに笑い合う．．．。

．．．．．そうこうしている内に、船が十六夜島の棧橋に到着した．  
．．．。明日は一時、本土に帰るんだ．．．。

ほんの少し切ない気持ちになった。早くまたここに戻ってきたい!!

(第9話に続く)

## 第9話 招かざる来訪者

夕方4時過ぎ、ほぼ定刻通りに中型船が棧橋に到着した。操縦室に船長さんと、サブ船長、船上には4人の人が立っていて、鮫島に向って手を降っている。

「……………んっ?! 4人? 助手が3人やって来るはずなのでは?

1人は両手を思いきり振ってはしゃいでる!! 女性だった……。年齢は、20代そこそこの若い女の子……。そして島には似使わない雰囲気、チャラい女性だった。

鮫島は額に手を当てて頭を振って、こりやまいった! といった感じの様子……。

「俊兄ちゃん! 来ちゃった!!」

船の上から、キャンキャンした声で鮫島に叫んでる……。

「何であいつが来てるんだよ!!」

サブ船長が船上から投げたロープを鮫島は受け取り、棧橋にあるピット(係留用の杭)にくくりつけながら、ブツブツ文句を言ってる。

「鮫島さん、よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

「お世話になります」

船から下りて来た男性陣3人は、年齢は瑞穂と同じぐらいの20代半ばぐらいで、非常に礼儀正しい好青年といった感じだ……。

「おお……よく来たな……。こちらこそ宜しく頼むよ。来てく

れて助かるよ」

鮫島は、完璧に女性を無視して、助手3人を歓迎してる。

「もうっ！ 俊兄ちゃんつたら！！ 無視しないでよ！！」

助手と鮫島の間割り込むようにして、女性が鮫島の腕に自分の腕を絡ませ、猫なで声を出す。

「お前は何できてるんだ！！」

鮫島は眉間にしわを寄せ、不満顔・・・。

「何でって遊びに来たのよ」

「誰も呼んでないぞ！！」

「いいじゃない！！私と俊兄の仲でしょう？」

女性は、鮫島の手を両手で掴んで、体をくねらせて甘えてる。

「次の船が来たら、帰るんだぞ！！ それから自分の面倒は自分で見て、俺をてこずらせたり、邪魔したりするなよ！！」

「は〜い！！」

肩手を上げて、返事した。

ずっとそのやり取りを見て、瑞穂は呆気にとられて固まってしまった。

その様子を見て、慌てて鮫島が皆に瑞穂を紹介・・・。

「あ・・・この子は、立花瑞穂君。一旦本土に帰るが、これから私の事を色々手助けしてくれる優秀な助手だ・・・。それからこの青年達は、俺の大学の後輩で、こちらから尾形宏信君、栗田武史君、おがた ひろのぶ、くりた たけし」

しみず わたる  
清水巨君だ．．．」

瑞穂と青年達は互いに挨拶し合う。

「それからこの子は、俺の遠い親戚の白石佳奈子しろいしかなこ。まあ、瑞穂君は明日この船で一旦本土に戻るから、皆と関わるのは今夜だけかな．．．」

佳奈子が物凄く不満顔で、瑞穂を睨み付ける。

瑞穂も、遠い親戚の子と言ってるが、その戯れつき様が普通じゃない感じもして気になってしょうがない．．．。

「それじゃあ、船の荷降ろしでも始めるか．．．」

鯨島の号令の元、皆で荷物を運び込む．．．。まず電気で走る軽トラックに荷物をどんどん積み込んでいき、斜面の上の家にピストン輸送で運ぶ．．．。

食材は、野菜や果物、魚介類などは自給自足だが、それ以外の冷凍の肉、小麦粉、玄米や調味料類などは購入している．．．。大量に買って大型の玄米野菜保冷库や、大型冷凍庫に保管。

それ以外に薬品やら、検査器具、生活物資など．．．。助手達は、勝手知ったる我が家という感じで、手慣れた物で、トラックから家に運び込むと、家のそれぞれの置き場所にどんどんと仕分けして片付け始める．．．。

鮮やかな感じで、あっという間に片付いた。

「あれえ？私の荷物は？」

さつきから殆ど手伝わなくて、プラプラしていた佳奈子が、自分の荷物が運ばれてない事に気がつき文句を言っている。



「馬鹿者！！さっき言っただろ。自分の面倒は自分で見るんだよ！！」

鮫島が、叱りつける。

「え〜っ。ひど〜い．．．」

瑞穂が係留されている棧橋を見たら、棧橋の所に佳奈子のスイツケースがそのままの状態で置かれていた。

「1人じゃ無理！！誰か手伝ってよ！！」

「じゃあ私が行きましょうか？」

「瑞穂君、放つときなさい！！」

鮫島がブスツと怒った顔．．．。

「だれか〜」

泣きそうな顔の佳奈子。

「やっぱり私行きますよ」

そう言って、瑞穂が棧橋への斜面を下っていった。

「お前の荷物だろ、サボってないで早くいけ！！」

鮫島が、佳奈子の尻をひっぱたく。

『キヤーツ！！』

お尻を押さえて、佳奈子が慌てて瑞穂の後を追う。

棧橋に着いて、瑞穂が佳奈子のスイツケースの取っ手を持って、家までの斜面を上り始めたら、佳奈子が残りの小さなショルダーバッグ

グを持って追いかけてきた。

「ねえ．．．。瑞穂さんだっけ？」

「あ．．．はい」

「俊兄ちゃんにちょっとかいかけないでよ!!」

「えっ？」

その言葉に瑞穂の目が点になった。

「俊兄ちゃんは私のフィアンセなんだから．．．。近々結婚すると思っし．．．。」

．．．．．凄くショックだった．．．。フィアンセ．．．フィアンセ．．．フィアンセ．．．。それは本当なのだろうか．．．。

瑞穂に大きな荷物を持たせている様子を見ていた鮫島が、慌てて斜面を駆け降りてきた。

「瑞穂君ごめん」

鮫島が瑞穂からスーツケースを受け取って、ガミガミ佳奈子に叱りつけながら、スーツケースを家まで運んだ。

「ふふふ．．．。俊兄ちゃんはやっぱり優しいな．．．。」

佳奈子のその言葉と惚気のような一言に、瑞穂の心はモヤモヤでいっぱいになった．．．。

(私って馬鹿みたい．．．何を期待していたの?)

そして自分の下心で溢れ返る卑しい心の内を知ってしまった．．．。

鮫島に佳奈子という婚約者がいると知った途端、この島に滞在する意味失ってしまった気持ちになった。

この島も勿論大好きだけど、それよりも何よりも鮫島の事が好きだったのだ……。

こんな気持ちでもう、鮫島と一緒に2人きりでの島生活は無理……そう悟った。

（ああ……なんて私は嫌な女なのだろう……だから、結婚相手にも逃げられてしまったのかな……）

その日の夜は、皆でバーベキュー&飲み会をして、親睦を深めた。終始佳奈子は鮫島にベツタリで、鮫島はかなり不機嫌だった……。悲しかったけれど、最後の夜ぐらい明るく振る舞わないと……。この楽しい島生活の思い出を、大切な思い出として心の中に留めておくためにも……。

バーベキュー&飲み会もそろそろお開きとなつて、助手3人は、2段ベッドが2つ置かれている大部屋に……。佳奈子は客間に……。船長と副船長は、停泊している船にそれぞれの場所へと散っていった。

皆で大体は片付け終えたが、最後に残った細々した片付けを、鮫島と瑞穂と2人でやった。

「瑞穂君、最後まで手伝ってもらってすまなかつたね……」

「いいえ……。こんな事大したことじゃありませんから」

「あとは明日野郎どもにやらせればいいから……。ちよつと冷茶でも飲んで一休みしないか？」

「あ．．．はい。それじゃあ．．．」

鮫島と向かい合わせに、テラスのテーブルベンチに腰かける。

「さつきから、ちょっと元気なさそうだけど大丈夫？」

「えっ？そんな風に見えますか？」

さ．．．鮫島さんって鋭い．．．。瑞穂はドキリとした。

この際だから気になる事を聞いて、本土に戻ろうと思った。

「あの．．．佳奈子さんって．．．」

「え？」

生唾をゴクリと飲んで、聞いた。

「佳奈子さんって．．．鮫島さんの．．．ファイ．．．」  
緊張する一瞬で、喉が乾いて言葉に詰まった。

「ああ．．．佳奈子？ そうみたいだね．．．。つたく．．．子供  
でギャンギャンと五月蠅くて参るよ」

．．．．．ガーン！！やっぱファイアンセなんだ．．．。  
その時もうここに帰って来るのはやめようと思った．．．。

「あ．．．私．．．そろそろ寝ます。本当に、色々お世話になりました。ここでの暮らしの事．．．私の一生の宝物です．．．本当に．．．本当に．．．ありがとうございます。おやすみなさい」  
瑞穂はスツクと立ち上がって、早足で部屋に逃げようと思ったが、  
不覚にも、それ以前に涙が出てしまって、慌ててくるりと踵を返して鮫島に背を向け、早足で部屋に行った。

（あゝバカバカ．．．瑞穂のバカ！！何であそこで泣いちゃうのよ

！！ 鮫島さんが不審に思うでしょうが．．．）  
．．．．．その日の夜は布団の中で大泣きした。

\* \* \* \* \*

翌日鏡を見たら、目が腫れててビックリした．．．。  
慌てて何度も顔を洗って、昨晚バーベキューで張り切りすぎて、寝不足になって目が腫れたと言う事にした。

船は朝8時に出港の予定．．．。

いつの間にか鮫島が、その格好じゃあ本土に戻った時に恥ずかしいでしょうと、瑞穂の為に着る物を注文しておいてくれた。

昨日、船から運び込んだ荷物の中に混ざっていたそうで、朝、服と下着を受け取った。

でも．．．なんで私のサイズを知ってるの？（恐っ．．．）

．．．．．鮫島さんからの最初で最後のプレゼントですね．．．。  
嬉しいです．．．。

レースフリフリの下着（鮫島の趣味か？！（冷や汗））に、可愛いフェミニンなワンピースに、可愛いペタンコシューズ。

それに、髪の毛を縛る可愛いシュシュまで．．．。

この服を着て部屋を出たら、佳奈子さん以外全員、とても可愛い．．．  
．似合う、素敵だと言ってくれた。

鮫島も、嬉しそうに目を輝かせてた．．．。その目が愛おしい者を見るような意味深な感じで怖い．．．。

（ああ．．．鮫島さん．．．。そんな目で私を見ないで！！）

出港間際 鮫島は、何やら真剣にボソボソとずっと助手達に話しかけてて、瑞穂はろくに最後のお別れの挨拶も出来なかった。

．．．．．あんなに本土に帰りたく無かったのに．．．とうとうこ

の日はやって来てしまった．．．。

「鮫島さん．．．お世話になりました．．．」  
助手達と雑談してる鮫島の背中にボソツと最後の挨拶をして船に乗り込んだ．．．。

（鮫島さん酷いです．．．。最後のお別れの言葉ぐらい顔を見て言いたかったのに．．．もう私は用無しなんですね．．．）

瑞穂が船に乗って、すぐぐらいに船は出港した。

瑞穂は悲しくて、島を見ることも出来ず、船室のサロンの椅子に腰かけて、テーブルに突っ伏して泣いた．．．。

誰かが瑞穂の頭に手をおいた．．．。サブ船長さん？

「副船長さん．．．気にしないで下さい．．．大丈夫ですから．．．」  
泣き顔を見られたくなくて、突っ伏したまま言った。

「誰が副船長だって？」

「！！！！」

こ．．．この声は．．．。顔を上げて驚愕した．．．。

「さ．．．さ．．．鮫島さん．．．。何でここにいるんですか！！」

「なんか瑞穂君の様子が変わったから、このまま帰したら、もう島に戻って来ない予感がしたし．．．それにウザイ佳奈子と一緒に島生活はゴメンだからね．．．。助手に2週間任せる事にして、俺も瑞穂と一緒に本土に行く事にしたんだ．．．」  
鮫島がニヤリと笑った。

「だ．．．だ．．．だって．．．。佳奈子さんは鮫島さんのフィアンセでは．．．。島に置いてきては不味いのでは？」

「はあ？ フィアンセ？ 誰が．．．。彼女は俺のストーカー．．．。佳奈子は俺のファンだって言っただけでつきまといてるけどね．．．勘弁だよ！！」

「だって佳奈子さんが、『鮫島さんは私のフィアンセで近々結婚するから』って言ってましたよ．．．。」

「あいつめ！！そんなでたらめな事を．．．。もしかして、それで昨日から様子が変わったのかな？」

「そ．．．そうです．．．。私．．．自分の気持ち分かりませんでした。とつても不純な気持ちで島に残りたいって言ったのだと思います。勿論島も大好きですが．．．さ．．．鮫島さんの事．．．」

「シャラップ！！」

その言葉を鮫島が遮った。

「そう言う事は男の方から先に言わないと．．．。俺、瑞穂に惚れまくってしまったし．．．。また一緒に島で暮らさないか？結婚を前提に．．．。いますぐ結婚しても俺はいいけれどね．．．。俺の助手はやめて、奥さんになってくれないかな？」

照れながら鮫島がにっこり笑って言った。

「ええええーっ！！！」

(第10話に続く)





## 第10話 あなたと本土へ・・・

.....突然のプ・・・プロポーズ・・・?!

啞然としたけど、凄く、凄く、凄~~~~く嬉しかった。

「は・・・はい。あなたの奥さんになりたいです。こんな私でいいのですか？」

とても顔を見ては答えられなかったので、真っ赤になってモジモジしながら俯いて言った。

「もう・・・俺には勿体ないぐらい素敵な人だよ・・・」  
そう言つて、抱きしめられた・・・。

「君のご両親に挨拶に伺つてもいいかい？」

「はい・・・」

「本土にいる俺の両親にもぜひ会つて欲しい・・・」

「はい・・・」

ああ・・・幸せ・・・これは夢じゃないですよね？

「佳奈子さんはフィアンセじゃなくて・・・鮫島さんのファンだったのですね」

「君が『フ』つて言うからてつきり『ファンなんですか？』つて聞いてきたのかと思つて、『そうみたいだね』つて答えたのに・・・。なんだか泣かせちゃつたみたいだし、永遠の別れの時の最後の言葉のような事をいきなり言うし・・・ちよつとこれはつて不安に思つ

てね。昨夜慌てて旅行バッグに必要な物を詰め込んで、夜のうちに船に乗せておいたんだ。

俺が本土に行くって佳奈子に悟られるとくっついて来られそうだし。。。

2週間助手達に留守を急に頼む事になったから、色々伝える事もあつてねちよつと焦つてた。。。

棧橋では本当につれないそぶりを見せて悪かったね。

でも、おかげで佳奈子をまく事が出来たし。。。。佳奈子も2週間あそこで暮らしたら、うんざりしてもう二度と来ないと思うしね。。

・ゆっくり君にプロポーズしたかつたし。。。」

「私。。。。嬉しいです。。。。幸せです。。。」  
モジモジと意味もなくテーブルの上にひとさし指で、意味のない落書きをして、恥ずかしくてどうしても鮫島の顔が見れない。

「俯いてばかりいないで、俺に君のかわいい顔を見せておくれよ」  
鮫島に両手で頬を挟まれて、顔を上げられて、目と目を見交わした。

(は。。。。恥ずかしすぎます。。。。)  
心臓が口から飛び出しそうな瑞穂に、鮫島の顔がゆっくり接近してきて、優しくふんわりと口づけされた。

(し。。。。幸せすぎます。。。。!!!!)

瑞穂は顔がかーつと赤くなり、ぽわんと逆上せ上ってしまった。

だが。。。。だんだん。。。。冷や汗が出て来て、めまいがして、胃がもたれたようになり。。。。。

「さ。。。。鮫島さんーッ!!」

「んっ?」

「私．．．吐きそう．．．」  
慌ててトイレに駆け込む瑞穂．．．。  
あとはベッドの上で、グデングデンに伸びた状態に．．．。

「ったく．．．折角いいムードだったのに。瑞穂らしいと言えば瑞穂らしいが．．．こんなシチュエーションで普通、船に酔つか？」

「だ．．．だって．．．だって．．．」

「もしかして．．．俺の子が出来たのか？ つわりか？」  
鮫島が意地悪そうにニヤリとした。

「もう．．．こんな時にそんな冗談はやめて下さいよ。本当に気持ち悪くて死にそうなんですから．．．」  
顔面蒼白で真っ青になって、フラフラ状態の瑞穂。

「でも．．．そんな所も可愛いよ」  
髪の毛を優しくなでられて、夢心地気分．．．。

\* \* \* \* \*

午後4時過ぎに、東京竹芝桟橋に船が到着．．．。

「や．．．やつとついた．．．」  
あまりにもグデングデンに船酔いしすぎて、歩く事もままならない瑞穂は、鮫島におんぶされて、船を降りた。

「こんなに船に弱いとは．．．。もしかしてあの日、急性アルコール中毒じゃなくて、酷い船酔いだったのかな？」

「お恥ずかしいです・・・」

「まあ気にすんな・・・」

「はい・・・」

その時だった・・・。

「瑞穂!!!」

「瑞穂ちゃん!!!」

瑞穂の両親が駆け寄ってきた。

「お父さん、お母さん!!!」

鮫島が側にあつたベンチに瑞穂を降ろして、久しぶりの親子の再会を果たした。

「初めまして・・・鮫島と申します」

「おおっ・・・あなたが瑞穂の命の恩人の方ですね」

「瑞穂を救つて下さつて・・・本当にありがとうございます」

瑞穂の両親は、命の恩人である鮫島の事をたいそう気に入り、どうぞどうぞ熨斗を付けて差し上げます状態で、2人の結婚を許諾した。

鮫島の父は、大手水産会社の会長で、鮫島の兄が社長を務めている。鮫島自身も、その会社の副社長兼任研究所長を務めていた事が分つた。

それ程堅苦しい家族ではなく、人なつこい明るい家族で、2人の結婚を快く許してくれた・・・というか、ちよつと変わりもんの俊彰に奥さんがやつと・・・と、もろ手を上げて大歓迎され、一緒に島に住むのなら先に入籍だけでもしてはどうかと強く勧められて、島

に戻る前に入籍する事になった．．．。（早っ！！！）

今日は一緒に結婚指輪を買いに行く所だ．．．。

2人で意見が一致．．．。素敵な指輪を選んだ。

マリッジリングは、指輪の表面が、ゆらめく海の波の波形のような形のデザインで、中には海の生き物が彫られている。

お互いのイニシャルを彫ってもらった。

エンゲージリングは、波しぶきのようなデザインで、大きな真珠と小さなダイヤモンドが2粒で、しぶきを表している．．．。

「凄く素敵です．．．嬉しい．．．」

とてもはしゃぐ瑞穂に、俊彰も大満足の顔．．．。

「そうだ．．．。あのいわく付きの教会で結婚式を挙げちゃおうか？」

「ええっ？でも．．．縁起が悪そうで心配です．．．また挙式間際に何か起きないかって．．．」

凄く不安そうな顔の瑞穂。

「あそこで式を挙げて、悪運を断ち切ろうよ！！」

「はあ．．．」

その教会の空きを伺いに行った所、急遽2日後にキャンセルが1件あるとの事で、慌ただしく、ほんの内々の身内だけで式を挙げる事になった

互いの両親、家族はあまりにも急な事でちょっと困った様子だったが、それでも喜んで祝福してくれた。

そして島に戻る時は、瑞穂が漂流したあの海岸からチャーターしたいつもの船に乗って、島に向った。。。

あの十六夜島を出る時は、傷心の悲しみいっぱい船出だったのに。。。

今は幸せいっぱいの船出。。島に戻るのがとても楽しみ。。。

「今回は、酔い止めを飲んだし船酔いは大丈夫そうです!!」

「良かった。。じゃあ快適な船旅になるね」

2人して寄り添いながらデッキに立って、陸は何も見えない、ただ青い海が広がる風景を眺めていた。

「ここからエンジンもない小舟で、よく島まで渡る事が出来たなとゾツとします」

瑞穂がその時の事を想像して、ブルツと身震いした。

「本当に。。何もなく良かったよ。。それから島に流れてきてくれてありがとう。。。ちょっとお礼を言いたくなってしまったよ」

嬉しそうに微笑む俊彰。

「私の方こそ。。助けて下さって、親切に下さって。。私を奥さんに貰って下さって、ありがとうございます」

手と手を重ね合わせて、見つめ合い微笑み合う2人。。遠く微かに十六夜島がぼんやりと見えて来た。。。

(第11話に続く)

## 第11話 スウィートな島生活

久里浜からの出港は、東京港より大分距離が近くなるので、いつもよりは早い時間の、午後2時過ぎに十六夜島の棧橋に到着した。助手3人は嬉しそうに笑顔で出迎えに来てくれた。

「皆、留守中いろいろとありがとう!!」

「鮫島さんお帰りなさい!!」

「待ってましたよ」

「お帰りなさい!!」

1人佳奈子だけが、怒りにうち震える感じで、棧橋に仁王立ちしていた。

慣れない島生活で苦勞したのか、少しやつれて、目の下にクマがある……。

「もうっ!!俊兄ちゃん!!私1人残して島を出ていっちゃうなんて酷いじゃない!!」

「なんだ!!誰もお前の事は呼んでないぞ、何で俺がお前の側にいないといけないんだ!!」

キラリと銀縁眼鏡が光り、ムスツとした顔の俊彰。

「何でって……俊兄ちゃんに会いにこの島に来たんだからね……」

「俺は忙しいんだ!!お前のような暇人に構っているわけにはいかないんだ!!」



「ひどい！！お兄ちゃんの事が好きで船で何時間もかけて会いに来たのに……」  
ベソベソとベソをかき始める佳奈子。

「そうだこの際だからお前に言っておくが、俺にもう付き纏うな！俺はもう既婚者だからな！！」

その言葉には助手達も非常に驚いた。

「鮫島さん……結婚されてるんですか？」

「ええっ！！いつの間に……」

「初めて聞きましたよ！！」

「今初めて言うんだから当然だよ。本土に戻っている間に、彼女にプロポーズして、式を挙げて入籍したんだ！！」

『キヤーツ！！！！』

その言葉に、佳奈子は半狂乱になって、パニックを起してる。

「なんで……なんで……なんでなのー！！！！」

「なんでってそりゃあ、彼女に惚れてるからに決まってるだろう！！」

そう言っただけで、佳奈子に見せつけるように後ろから瑞穂に抱きついて、甘えるように頬擦りした。

「キヤーツ！！！！」

いきなり抱きつかれて、驚く瑞穂。

(こ……こんな所で……は……はずかしすぎる……！！！！)

3人の助手達は目のやり場に困って、それぞれあさっての方向を向いて惚け顔……。

佳奈子は益々半狂乱状態・・・。

「もう・・・こんな所今すぐ出てってやる・・・!!」

「おお・・・佳奈子良かったな。今日、この船はこれから八丈島に用があつてな、今晚そこに停泊するんだ。

だから、連れて行つて貰つて、飛行機で帰りなさい」

鮫島のその言葉に、佳奈子は赤鬼のように怒りまくつて足を踏みならした。

「もう絶対に俊兄ちゃんになんか会いに行く物ですか!!帰る!!」

「じゃあスペシャルサービスで、荷物を持って来てやるから・・・」

「いいっ!!自分で持つてくるから!!」

そう言うど弾丸のように、荷物をまとめて佳奈子は船に乗り込んだ。それから船は出港し、佳奈子は俊彰にアッカンベーをして去つて行った。

小さくなつていく船を見ながら、俊彰がポツリとつぶやいた。

「やつと帰つてくれたな・・・当分ここには来ないだろう・・・。

いや・・・もう二度と来ないかな?」

「いやあ〜彼女のお守りは大変だつたんですよ・・・」

一番面倒見のいい栗田が苦笑しながら呟いた。

「いやあ〜申し訳無かつたね・・・。時々気まぐれにやつて来る佳奈子には本当に困つてたんだ。ちよつとの事で悲鳴を上げるし、手間暇かかるし・・・」

「俺達もあまり長居すると悪いですね・・・」

俊彰と瑞穂と見比べながら、清水が頭を掻いて照れながら言った。  
隣で尾形と栗田も頷いている。

「そんなぁ．．．気にしなくてもいいですよ。普段は2人だけですし、たまには人が居て賑やかな環境も楽しいですし．．．。ね、俊彰さん」

瑞穂が照れ笑いしながら、俊彰を見た。

「そうそう．．．。君たちさえ気にならなければ、俺達は俺達で勝手に戯れついでるからね」

ニカツと笑顔の俊彰。

「うん。でも、ちょうど夕方へりが到着しますし、早く本土に戻れますし、俺達それで帰りますよ」

「うんうん．．．鮫島さん達はどうぞごゆっくり．．．」

「また近々伺わせてもらいますから．．．」。  
流石に独身男性3人組には、新婚ホヤホヤの夫婦と一緒に生活は刺激が強すぎるようで、それからすぐへりで退散して行った。

\* \* \* \* \*

静かな夜、聞えてくるのは波の音と虫の声．．．。テラスの木のプランコに2人並んで座っている。

「俊彰さん、また2人きりになりましたね」

「実を言うと、2人きりになってちょっと嬉しい気持ちなんだ」

「これから末長くよろしくお願いしますね」

「こちらこそ、よろしくね」

「私・・・俊彰さんの様にお料理上手じゃないし・・・ちょっと不安なんですけど・・・」

「じゃあ料理は俺に任せて！！ お互いに自分の得意な事を担当すると言う事で、協力し合って仲良く暮らしていこう！！」

「私・・・海蛇の蒲焼き好物になりましたよ」

それを聞いて微笑む俊彰。

「私に出来る事って・・・。俊彰さんは何でも出来ちゃうし・・・何が出来るんだろって思ってしまいます」

「ほら畑仕事は丁寧に綺麗に作業してくれるし、俺にはかなわないよ。それに何でも一生懸命で健気で可愛らしくて・・・。うん・・・。そうだね・・・。一番は、側にいてくれると楽しいし、俺を癒してくれて、すごく幸せな気持ちになれるからね・・・。そのままでもいいんだよ」

「そう言っただと・・・嬉しいです」

「この暮らしはね・・・なかなかいいもんだと思っただけけど、ちょっと物足りなさを感じていたんだ・・・。その足りない物、それは君だったんだ・・・。あの日君は俺の奥さんになる為に流れて来たのかもしれないな・・・」

「えっ？」

「最高にいい漂流物を見つけたよ!!」

微笑み合う2人・・・。

それから2人寄り添って、長い時間、満天の星空を見上げていた。

(END)

## 第11話 スウィートな島生活（後書き）

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

あれもこれも連載中の作品を増やしすぎてしまい、とにかく最後まで書くこうと頑張りました・・・。

ちょっと無難な終らせ方だったかもしれませんが。（すみません。）

島の楽しいエピソード新婚編・・・アイデアが浮かびましたらまた番外編でUPしようかなとも思っています。

**番外編 甘くない新婚生活・その1（前書き）**

長々とお待たせしました。

2人のsweetな？！新婚番外編スタート！！

お楽しみ下さい。（^^）

番外編 甘くない新婚生活・その1

広いウッドデッキの丸いガーデンテーブルに、仲良く横並びに寄り添うように椅子をくつつけて並べて、海を見ながら朝食をとる俊彰と瑞穂。

テーブルの上には、早朝俊彰が畑から採ってきた新鮮な野菜のグリーンサラダ、そして2人の共同作業で作った愛の?!手作りパン。パンは、お天気の良い日に2人で大量にパンを作る。

自家製酵母で、発酵は太陽の熱を利用して発酵させ、完成間近まで焼いて、密閉チャック保存袋に入れて冷凍しておいて、食べる時にもう一度オーブンに入れて仕上げ焼すると焼きたてほかほかのパンが楽しめる。

それから、畑の脇で飼っている地鶏のウコツケイの卵を使ったスクランブルエッグとチョリソーソーセージ。

ジャムは、山で採取した木イチゴと、野生化したブルーベリーの自家製ジャム……。

それから同じく畑脇で飼っている、ヤギのしぼりたてミルク……。牛乳は、常温保存可能牛乳は入手できるが、新鮮な加工乳ではない牛乳は、離島であるここでは入手不可能……。牛を飼う事はちょっと大変なので、ヤギを飼っている。飼ってみればなかなか愛らしくて可愛い……。

「瑞穂……」

俊彰が若干目尻を下げながら、呼ぶ。

「な・あ・に?」

含羞みながらモジモジと照れながら答える瑞穂。

「ちょっと口を開けてみて」



「えっ．．．」

「ほら．．．『あ〜ん』って．．．」

俊彰がミニトマトのへたを持って、ミニトマトを瑞穂の口に放り込もうと待ちかまえてる。

「それってちょっと．．．恥ずかしすぎま．．．もっっ．．．」  
そう言っている間に、口に放り込まれた。

「朝取りのトマトは甘くて新鮮でおいしいなあ．．．」  
いつものちよっとイタズラっぽい笑顔で俊彰が照れ隠しした。

もぐもぐゴツクンしてから、瑞穂がちよっと拗ねた顔する。

「ん．．．もっっ．．．」

「いいじゃないか．．．。ここには俺とお前と2人だけしか居ないし．．．」

そう言いながら、フォークを持ってない空いている左手をそろそろと伸ばして、瑞穂の背中に手をまわして愛おし気に抱き寄せた。

結婚して気がついたが、俊彰は意外と甘えん棒でスキンシップの好きなタイプの情熱家だった．．．。

「ふふふっ．．．」

何となく、そんな俊彰がちよっと愛おしく可愛らしくも思えて来る。

「おいおい．．．。なに笑ってるんだ？」

意味不明な瑞穂の笑いが気になる．．．。

「うっん．．．。いつも眼鏡をかけているから分からなかったけれ

ど．．．。寝る時に眼鏡を外したあなたも素敵だなんて思ってた．．．。眼鏡姿も理知的で素敵だけれど．．．外した素顔は彫りが深くて西洋人っぽい顔立ちで素敵だなんて．．．まつ毛もとっても長くて綺麗な瞳をしていて．．．どっちも素敵．．．」

「そうかい．．．」

俊彰は嬉しそうに微笑んで、照れ隠しに遠くの水平線を眩しげに見た。

それから少し間をおいてから突然閃いたように．．．。

「あゝっ！もしかして昨晚の事想像してにやけてる？瑞穂ってウブな顔をして意外とムツツリだなあ．．．」

またまた意地悪そうな顔をして茶化す俊彰。

「なっ．．．。そんな事考えてませんよ！！ やだあゝ俊彰さんの方こそムツツリだわ！！！」

ぷーっと頬を膨らませ、赤くなりながら不貞腐れる瑞穂。

そんな昨晚の事だなんて．．．。『きゃゝっ！恥ずかしすぎる！！』

「ははははっ！男は皆ムツツリなんだよ！！いや、オープンだからムツツリじゃないか．．．エッチ？！」

「やあだあゝ。俊彰さんだったら．．．朝からそんな．．．」

手をパタパタしながらますます火照る顔を冷ます瑞穂．．．。

そんな瑞穂を微笑みながら愛おし気に見つめる俊彰．．．。

「瑞穂．．．愛してるよ．．．」

「私も．．．愛してます．．．」

見つめあう2人．．．。

．．．．．こっぴやうってラブラブなスイートな．．．楽しく甘い日

々が毎日・・・永遠に・・・続いていくはずだったのに・・・。  
ある日突然・・・2人の甘い新婚生活にとんでもない嵐がやってき  
たのだった・・・。

（次話に続く）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8684u/>

---

Paradise Island ~ あなたの島に流されて

2011年9月11日00時07分発行